

魔装学園HxH 二天龍の魔装学園

卓ちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕は神様の中で話題になっている、異世界転生に巻き込まれ、死んでいないのに転生することになった。

神様から特典としてハイスクールDXDの二天龍の力とFateの宝具を使えるようにしてもらった。よし！僕はこの力で生きてやる!!

初めて書く作品なので誤字脱字あるかもしれませんが温かい目で見てください。

目次

設定集	1
第零話 プロローグ	4
新たな世界と全時空粉碎へバルバライザー	〈
第壱話 目覚めた世界	7
第弐話 戦闘準備	9
第参話 戦闘開始!!	11
第肆話 全校集会	13
第伍話 ナユタラボ	16
第陸話 デートと過去	20
第柒話 襲撃	24
第捌話 背徳武装	27
第玖話 襲撃の終わり	29
過去の因縁と絶世破断へグラディウス	〈
第拾話 温泉と姉の秘密	32

設定集

名前 飛騨 剛希 【ひだ ごうき】

異世界転生したオリ主。原作主人公の飛騨傷無【ひだ きずな】の双子の弟という立場。

オリ主は原作を読んだ事がない。だが、神様の与えた知識で、ある程度の世界情勢は、知っている。

傷無と同じくハートハイブリッドギアのコアをインストールしている。

神様の特典でハイスクールD×Dの二天龍の力とFateの宝具をえるようになったが、まだ使いこなせない。親しくない人には「〜さん」「〜くん」と呼ぶが、親しい人には呼び捨てで呼んでいる。

傷無のハーレム状態をニヤニヤしながら見ている。

しかし、本人はモテたいとは思っていない。

学園に来る前は、傷無と二人暮らしをしていた。

姉である飛騨怜悧【ひだ れいり】とは嫌いではないが、????が起きたあと、少し距離を取り始めた。母親である飛騨那由多【ひだ なゆた】とは、嫌いではあったが、????の時に助けてもらうと、少し嬉しかったが、????が終わった後、姉と同じく距離を取り始めた。

男子からは、傷無と同じく嫌われている。

クラスは傷無と同じ二年甲組で、傷無の後ろの席である。他のハートハイブリッドギアを持っている人達とは、仲はいいが、????している事もあり、その事をネタにいつもからかっている。学園には寮があり、部屋は傷無と同じ部屋である。

ハートハイブリッドギア説明

名前 ドロス 理由ドラゴンの力を持っているから。

能力

赤龍帝系

倍加（10秒ごとにハイブリッドカウント

が2倍になる。）

譲渡（ハイブリットカウントを他の人に譲

渡する。)

透過 (力を直接相手に叩き込める。)

白龍皇系

半減 (相手のエネルギー、カウントを半分に

する。)

吸収 (半分にした力を自分のものにする。)

反射 (相手のエネルギーを反射する。)

減少 (カウントを吸収せずに徐々に減らして

いく。)

オリジナル系

貯蔵 (倍加と吸収したカウントをいくらでも貯

める事が出来る。宝具を放つ武器はこの中に入っている。)

?????

赤龍帝系

龍神化 [D x D]・G <ディアボロス・ド

ラゴン・ゴット >

白龍皇系

魔王化 [D x D]・L <ディアボロス・ド

ラゴン・ルシファア >

宝具

????? <ライダー >

破壊神の手翳 <パーシユパタ >

????? <アーチャー >

????? <セイバー >

????? <ランサー >

日輪よ、死に随え <ヴァサヴィ・シヤクテイ >

黄金衝撃 <ゴールデンスパーク >

永遠に遠き勝利の剣 <エクスカリバー・シリ

ズ >

????? <バーサーカー >

光輝の大複合神殿 <ラムセウス・テンテイリス >

「キヤスター」

「アサシン」

「???」
「無二打」へのうちいらす

「破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）」

能力や宝具は、オン、オフの切り替えをする事が出来る。しかし、
「倍加」は、オン、オフの切り替えが出来ない。そして宝具は、1日に
5回までしか使えない。（強制では無く、神によると使い過ぎるなど
いう忠告ではあり、周囲を壊さなければ、何回でも使っていいという
事らしい。）

だが、能力や宝具が強すぎて、今は本人は使いこなせない。

そして「ロス」とつくものには「???」という秘密があるらしい……。

宝具説明

永遠に遠き勝利の剣（エクスカリバー・シリーズ）

表示は偽りの聖杯戦争で出て来た、セイバーの宝具であるが、「エク
スカリバー」と名のつく物を使う事が出来る能力で、剛希が『エク
スカリバーが使えたらなあ』と現実で思った結果、なんか出来てし
まった宝具である。

第零話 プロローグ

気づいたら僕は、真っ白な空間にいた。本当に何も無い空間だった。僕はふと呟いた。

『どこだよここ、さっきまで家でゴロゴロしていたはずなのになく。』
『それはね、僕が呼んだからだよ』

どこからか声が聞こえてきた。

『誰だよあんた。』

僕の問いに謎の人物は答えた。

『僕は神様だよ、君が知っている神様とは違うけどね。』

『神様ね、本当かな?』

『あー!!その顔信じてないね!!まあ良いよ話したい事言ってい
?』

『まあ別にいいよ』

『じゃ、話をしようか』

『ネタに走るな!!』

『僕は他の神達が人間達を転生しているのを聞いて凄くいいなと思っ
てね、どこかいい人居ないかなって思ったら君がゴロゴロして
いてね、その瞬間、僕は衝撃を受けたよ。もう君しかいないと思っ
て、この場所に呼んだんだよ!!』

『まとめると僕は異世界転生しろと言うのか』

『うんそうだよ』と神様は言った。

『死んでないの?』

『死んでないの!!まあ細かい事は気にするなという事だよ。』

『はあもういいよ、それで場所はどこだよ。』

『なんと聞いてね、場所は魔装学園H x Hの世界だよ』

『はあ?なんでそんな世界に?』

僕が呆れ気味に聞くと、『なんとなくな』どうやらなんとなくらし
い。

『そうだ、特典だよ。特典!!』神は嬉しそうに言った。

『そうだな、決めたことはある。二つあるけどいいか?』『いいよ、い

いよ、全然!!』

神がOKと言っているからいいか。

『じゃあハイスクールD×Dの二天龍の力とFateの宝具を使えるようにして欲しい。』

『OKわかったよ。』神は嬉しそうに何かを弄っていた。

神に特典の話をして、くださった神の話が終わった。何だか凄く疲れた気がする。何故だろうか？

『じゃあ今から転生させるから準備してね〜』

『転生の準備とは一体何だよ。』

こっちは凄く楽しみにしているのに。

『あ、その前に、君の転生後のプロフィールを教えないとね。』

お、プロフィールを教えてくれるのはありがたいな。

『名前は、飛騨 剛希だよ。設定は原作主人公の飛騨傷無の双子の弟という設定だよ。そういえば、ハートハイブリッドギアの名前はどのような？』

そういえば考えていなかったな。そうだなあ…… あ！いい名前があった！

『ドロスなんてどうだろうか。』

ドラゴンの力を持っているのが由来だけど。

『ドロスカ…… いい名前じゃないか。じゃあそれに決定して、ようやく転生の準備が出来た。』

これが準備だったのかよ。最後に神はこう言った。

『じゃあ頑張つてね〜転生した後は電車の中で目覚めるからね〜。』

『はあ？それってどういう事だよ。』

『まあとにかく逝ってらっしゃい〜』

『字が違う〜!!!』

こうして僕の異世界転生ストーリーが始まった。

『ふう、飛騨 剛希君。頼むよ、「君にしか出来ない事があるからね。」私の我儘だが、彼女達を止めて欲しい。』

だって、その為にここに呼んで、転生させたんだから。

続く。

新たな世界と全時空粉碎へ(バルバライザー)〈 第壱話 目覚めた世界

剛希サイド

僕が目覚めると、神の言葉通り電車の中にいる。とは言っても、電車では無かった。いわゆるリニアモーターカーである。スゲーな。隣には僕の兄である飛騨 傷無が寝てる。何の夢を見ているだろうか？

傷無サイド

久しぶりに子供の頃の夢を見た。

『大丈夫か？兄さん。』俺の弟である飛騨 剛希が心配そうに聞いてきた。

『ああ大丈夫だ。』

そう、大丈夫だ。少し緊張していたからあんな夢を見たのだろう。

剛希サイド

どうやら大丈夫みたいだ。その前に、この世界はどんな世界なのか神に教えてもらった事で振り返ってみよう。

この世界は15年前に第一次異世界間衝突が起きたのだ。

異世界に通ずる衝突面へ(エントランス)が開き、そこから異世界の魔導兵器が現れた。この衝突面が開いていたのは、たったの二週間だけだったがいろんな国が被害を受けた。

だけどそれだけでは終わらなかった。半年前に第二次異世界間衝突が起きてしまった。第一次の比にならない規模だった。しかし、各国はメガフロートを建設していた。これにより各国は海の上を漂う移動国家になった。しかし、メガフロートに乗れなかった人もいる。その人達がどうなっているかはわからない。

まあ、説明は終わりだな。

そろそろ目的地に着くはずだからな。そう、ここが僕達の目的地である戦略防衛学園アタラクシアだ。

子供の頃に、僕達はこのフロートに住んでいたらしい。まあ、僕は

転生者だからわからないが神が記憶を書き換えたのだろう。ちなみに僕の姉である飛騨 伶俐も、このフロートにいる。そして僕達兄弟が呼ばれた理由は、昨日の夜にある。

『傷無と剛希か?』

『姉ちゃん!? どうしてここに?』

『理由はおまえ達のハートハイブリッドギアに用があるからだ。』

『これ、役に立たないよ?』 『僕も同じく。』

傷無の言う通りだ。正直、傷無のハートハイブリッドギアは、役に立たない。

そして、傷無のハートハイブリッドギアの名前が言いたくない。

ハートハイブリッドギアを起動するには、ギアの名前を叫ぶ必要がある。

だから傷無はその名前を叫びたくないのだ。まああの名前を叫ぶのは、凄く恥ずかしいだろうな。

僕もその名前を叫びたく無い。まあ、公衆の面前であの名前を叫んだら、間違いなく捕まるだろう。

なんで傷無のギアの名前をあんなのにしたのか、直接母さんに聞きたいよ。

僕の方は、単純でギアの力を使いこなせないからだ。しかし、そんな言い訳を言った所で、姉には勝てないのだろう。何故なら、子供の頃の恥ずかしい黒歴史などを全世界に公表すると言って来たからだ。こんな感じで今に至る訳で、僕達はアタラクシアの前に着いた。

続く

第貳話 戦闘準備

ついに僕達はアタラクシアの前に着いた。その後入境審査を受けた。受付は人間では無く、立体映像のCGキャラだったが。

『本日、戦略防衛学園アタラクシアに転入予定の飛驒傷無さんと飛驒剛希さんですね。年齢はどちらとも17歳、転入の学年はどちらとも高等部の二回生で間違いありませんか?』

本当に転入することになっている。

『はい。そうです。』

『はい分かりました。アタラクシアへ、ようこそ!!』

こうして、僕達はアタラクシアの中に入った。

剛希サイド

『兄さん、ここは別れて色々見てみようよ。』

そう提案すると、兄さんは『おう、そうだな。』と行って、僕達は別れた。

さてさてここが、アタラクシアの中か。凄く色んなお店があるだなあ。それにしても、腹が減ったな。どこかにいいお店無いかな? うーむ。どこも満席だな。どうしようと悩んでいたら、けたましいサイレンが鳴り響いた。

『これって空襲警報?』おかしいな。今いるのは太平洋上の安全圏なのになあ。どうしよう? ギアを着装するか? しかし、初めてやるから、どんな事になるかはわからない。でもここでやらないと人々を守る事なんて、出来やしない。確かコアの名前を叫べばいいんだよな? よし、やるか!!

『行くぜー・ドロス!!!』

ああ、この久しぶりな感覚はなんだろう? 初めて着装するのになんてこんな感じになるだろう? その疑問は、すぐ解決することとなるが。

『あれ? ここって……。』

そう、あの真っ白な空間だった。

『ごめくん。あの事説明するの忘れてたよ。』

この能天気な声は……。

『何で神様の所にいるだろうな。それとあの事って何だよ。』

『君の能力や宝具に細かい説明がいる物があつて、その説明をするの忘れてしまつてね。その説明をしようと思つてね。』

『ほう、そうなのか。なら、早く説明してくれ。こっちは早く戦いたいんだ。』

『はいはい、分かりました。じゃあ説明するね。説明したいのは三個なんだけど、まず、能力の方だけど一つ目は、〈倍加〉の能力は、他の能力と違ってオンとオフの切り替えができないの。理由は、この能力は、真価を發揮するのにとても時間が掛かるのね。そして〈譲渡〉の能力も、この能力でカウント増やして無いと使えないというのが、理由なの。そして二つ目は、〈透過〉の能力は、ある制限をつけさせてもらうよ。それは、ハートハイブリッドギアの『絶対領域へライフセーバー』には〈透過〉が効かないようになってる事。理由は、君も女の子の体に直接攻撃なんて嫌でしょ？それが理由。次は宝具の方ね。三つ目は、宝具は、1日に5回までしか使えないこと。これはただの約束みたいな物で、別に破つてはいけないという訳では無く、あまり使い過ぎるなどということだけ、いわゆる忠告みたいな物だよ。まあ周囲を壊さなければ、何回でも使つていいよ。あ、武器の方はもちろん使つてもいいよ。よし。説明終わり!!じゃあ今度こそ頑張つてね!!』

こうして、また神との話が終わつて、遂に僕は、戦う事になる。

続く。

第参話 戦闘開始!!

神との話が終わって、遂に僕は魔導兵器との戦いが始まる。

『よし。ドロスのカウントもかなりある。初めての戦闘だけど、何とかやってみるか!!』

最初に出てきた魔導兵器は、神が教えてくれた事によると、全長10メートルを超える機械仕掛けの巨人。甲冑を思わせる魔導兵器の中でも、翼があり飛行可能な『羽根付きへアルバトロス』だ。

『アルバトロスカ。能力の方はどうしよう? まあ、とりあえず、半減と吸収と貯蔵をオンしておこう。倍加は、切り替えできないからな。それと、周りは森だから、宝具で破壊しない様にしないとな。その気になれば気にせずにバンバン撃てるんだけど、あれ、もの凄く疲れるからな。でも相手は空中にいるから、宝具を放つても大丈夫。さて、やろうか!!』

そう言って、僕はアルバトロスの所まで飛んだ。しかし、アルバトロスは僕に気づき、市街地の方に行った。

『あ!! 逃げた。よし、あれ使って倒してやるよ!! 初めて使うからどうなるかは知らないけど。』

そう言って、僕はあの準備に入った。そう宝具を放つ準備だ。ここは、空中だから使っても大丈夫なはず! 準備は簡単。貯蔵の能力で一振りの槍を出して、詠唱に入るだけ。簡単だね! では詠唱しますか。『神々の王の慈悲を知れ。インドラよ、刮目しろ。絶滅とは是、この一刺。灼き尽くせ、ー【日輪よ、死に随えへヴァサヴィ・シヤクティン!!!】詠唱が完了し、宝具を放つと槍からビームのようなものが出てきて、アルバトロスに当たった後に爆発し、凄いと云っていいほどの爆風が来た。

辺りを見回してみると地面が宝具の熱で少し溶けている。

これを見て、思った事は一つ。

『確かに、こんな市街地などに放ったら、辺り一帯が焼け野原じゃ済まないな。辺り一帯消滅しそうで怖い。』

そして僕は誓った。やはり、空中ぐらいでしか宝具は使えないと。

第肆話 全校集会

僕は、兄さんを捜して森を抜けて競技場に着いた。

ここにいるかな？と探してみると、ビンゴ。

そこにギアを着装している兄さんはいた。

『兄さん！なんでギアを着装しているん…だよ…。』

兄さんはいた、ただし女の子の胸を揉みながら。

その後、その女の子に殴られたが。

そして、上から来たアルバトロスをを倒し、降りて来た。銀髪が綺麗な子だった。

それよりも兄さんに聞きたい事があつたけど、言う前に兄さんから質問された。

『剛希！なんでここにいるんだよ！』

『それはこつちのセリフだよ!!何故女の子の胸を揉んでいたんだよ!!』

『これは、姉ちゃんが言った事で…。』

姉ちゃんが言った事？一体なんでこんなエロい事をやれと言ったのだろう？そう思ったいると、兄さんのモニターウインドウから姉ちゃんの声が聞こえた。

「傷無、そこに剛希はいるか？」

『ああ、いるけど。なんかあるのか？』

「なら、良かった。二人に用がある。愛音、二人を連れて例の場所へ来い。」

どうやら銀髪の女の子は愛音という子らしい。その後、空から、黒髪と金髪の女の子が降りて来た。

「ちようどいい時に来たな。姫川とユリシアも例の場所に来い。」

こつちは黒髪の方が姫川といい、金髪の方がユリシアと言うかな？

こうして三人の女の子達に連れられてきた場所は、アタラクシアの大講堂だった。僕も兄さんもアタラクシアの制服に着替えさせられた。大講堂にいる生徒の数は中高合わせて四千人近くいた。そして司会の人話が始めた。

『それでは、今回も敵の襲来を撃退した、ハート・ハイブリッド・ギアチーム「天地穹女神へアマテラス」の隊員達です。諸君、盛大な拍手をお願いします!』

凄いと云っていいほどの拍手が場内を包んだ。

『それでは続きまして、アタラクシアの校長兼、総司令からお言葉を頂きます。』

校長兼任なのか、一体どんな人だろう。舞台の袖から現れたは、若い女性だった。まあ、簡単に言うと、

『諸君、飛騨伶俐だ』

姉ちゃんだった。兄さんは、凄く慌てているが、僕も開いた口が塞がらない。その後、兄さんは姫川さんに落ち着かされた。そして、

『それでは、新たな仲間を紹介したい。転入生だが、ハート・ハイブリッド・ギアを宿している。つまり、入学と共に、アマテラスの入隊が決定している。』

お、ようやく紹介されるのか。

『では、紹介しよう。高等部二年甲組飛騨傷無と飛騨剛希だ』

そう言われ、僕と兄さんはステージの中央へ行った。その後、姉ちゃんが小さい声で、

『よく来たな、傷無、剛希。』

そう言うと、マイクの前に立った。

『これから説明する作戦は、最重要であり最優先すべき作戦となる。ここにいる飛騨傷無は、この作戦において最も重要な役割を担う事になるのだ。』

兄さんはそんな重要な役割があつたのか。

そう思つて後ろにあるスクリーンを見ると、そこには、愛音さんの胸を揉んでいる兄さんの映像が流れている。

もちろん、そんなことあれば、騒いでしまうのも当然であり、

『なあに、これ?』『へ、変態?』そして、

『きゃあああああああ!』

皆が叫んだ。もちろん、兄さんもその中に入っている。

『全校生徒、静まれ!』

姉ちゃんがそう言うと、周りが静かになった。

『いいか！今までハート・ハイブリッド・ギアがエネルギーを消費しても、遅い自然回復を待っただけだった。

しかし、我々はようやく補充手段を見つけたのだ。

それは、ハート・ハイブリッド・ギアを持つ二人の男女が、心と体を一つして、愛情と快感を共有する事で、ハート・ハイブリッド・ギアのエネルギーを補充する、「接続改装へハート・ハイブリッド」を可能にするのだ。

まあ、つまる所ここにいる飛騨傷無とエロい事するんだ！』

良かった！こっちはそんなことしなくても良さそうだ。

なんとって、倍加の能力があるからね！！

ホモオな展開が無くて良かった。

そんなことがあると一部の女子が「キマシタワー」を建設してしまう。

まあ、兄さんの方はあの三人の女の子達になんか言われてるみたい。

ちなみに、兄さんのハート・ハイブリッド・ギアの名前は

エロスだ。こんな名前は絶対に言いたくないな。

続く！！

第伍話

ナユタラボ

あんな事があって、1日後。

僕は、兄さんと同じ寮の部屋に住んでいる。

『ああ〜良く寝た……ん?』

『ああ!、剛希起きたか!助けてくれ!!』

そこには、千鳥ヶ淵さんが兄さんの上に乗っていた。

しかも、服が乱れている。それからわかる事は。

『兄さん、大人になったんだね。』

『全然、違う!!むしろ助けてくれ!!』

『さあ、早く始めましょうか。』

千鳥ヶ淵さんが何か言っているけど、なんだろう?

そう思っていると、

『飛騨くん達?そろそろ行かないとホームルームに遅れますよ?』

姫川さんが来ている。まずいぞ、これを見るとどんな事になるかわからない。

『まだ寝てるのなら起こして差し上げないと。』

止めなきやと思っているがもう遅く、入ってきた。

遅かったかあ。と思ったら、そしてその光景を見て、『破廉恥です!』と言って、姫川さんがネロスを着装していた。しかも、その後千鳥ヶ淵さんもゼロスを着装していた。そこから分かる事は、

嗚呼、僕達のお部屋めちゃくちゃになりそうだ。

その予感は的中してしまい、部屋が壊れて、僕達は先に教室に行く事になった。

その後、アタラクシアの二年甲組に入ることになった。

ちなみに女子しかないクラスだ。

そして授業を終え、お昼を食べようとして外に出ようとする時、

『おい、エロスの弟だぞ。』

『目を合わせないで、変態が移るよ!』

とんでもない冤罪を掛けられた。

僕は、そんな事やった覚えが無い。

何で、こうなったのだろうかと中庭で黄昏れていると、目の前にでかいリムジンが止まった。

『何だよ。この車?』

『剛希、急で悪いな、少し付いて来てほしい。』

『姉ちゃん!?どうしたんだよ一体?』

そう言いつつ、リムジンに乗った。中には兄さんが居た。

それともう一人いた。えらく小さな子だな。

『え〜つと、君は…?』

『ハイ!紹介が遅れました。私はシルヴィア・シルクカットといいマス!よろしくお願いします、剛希副隊長!!』

姉ちゃんの話だと、僕は兄さん率いる《飛騨隊》の副隊長らしい。ちなみに隊員はシルヴィアさんだけ。後々、アマテラスを率いてほしいと姉ちゃんは言っている。

そう揺られて着いた所は、研究所だった。

ここは、通称《ナユタラボ》といい、ハート・ハイブリッド・ギアの研究所だ。

何故、ナユタラボと言うのは僕達の母親がその名だからだ。

研究所に入っつてわかった事は、

母親の飛騨 那由多がいない事。この事についてはこの世界にはあの人はいないと予測があるらしい。

そして代わりに、小さい女の子がいた。

姉さんが言うには彼女は、母の代わりにこのラボの責任者である識

名 京という人だ。

キーボードで話してる。どっかのアニメで見た事有るんだよなこんな人。確か、スイツ…。いや忘れよう。

そして、僕達はハート・ハイブリッド・ギアの事についての話を知る事になった。

話を聞いて解った事だけを述べようと思う。

僕達のハート・ハイブリッド・ギアの性能が低いのは、特性が女子とは違う事。

ハイブリッドカウントは男子の方が、消費が少ない事。

ハート・ハイブリッド・ギアは年齢に合わせた調整をしないといけないらしい。

そして、この前の襲撃で兄さんが千鳥ヶ淵さんにやった事の説明があった。

どうやら、名前に「クロス」とついているギアは接続改装をするとその後に「絶頂改装（クライマックス・ハイブリッド）」というものをする。「背徳武装」という凄く強い武装が使えるらしい。僕にもそれはあるのだとか。

嫌だよ、そんな武装を手に入れる為に一部の女子が喜ぶ展開をさせてたまるか。

兄さんのギア、「エロス」は男性がインストールする事で特殊能力が使えるらしい。それが接続改装などをする事が出来る能力だとか。

僕のギアはわからないらしい。まあ、あの神様が出した物だからな。

兄さんの調整はすぐに終わったけど、しかし僕の調整は時間が掛かるらしい。解析も含めて調整するからだ。

そして、翌日。

僕のギアの調整はまだ終わらない。解析は終わった。

解析結果は皆、分かるだろ。

ギアの特異能力と宝具の事に二人ともびっくりしてたよ。

調整の方は、僕のギアの力をやってもらっているけどなかなか終わらない。特に宝具の調整がね。もう諦めたらしい。もう少し頑張つて欲しかった。

え、兄さんはどうしたって。兄さんはアマテラスの皆と一緒にインドネシア沖近くの無人島で資源調査をしている。

簡単な任務だと思っていたが、衝突面が出てきてしまい、そこから魔導兵器が現れてしまった。

しかも、不運な事に姫川さんと千鳥ヶ淵さんは兄さんとユリシアさんと二手に分かれ、資源調査が終わってアタラクシアに帰ってしまった。兄さんとユリシアさんで迎え撃つ事になった。

最初に出てきたのは『武装海賊（ヴァイキング）』そして、アルバト

ロスが出てきた。

しかし、ユリシアさんは少し余裕そうだ。

ユリシアさんが纏っている「クロス」には、砲撃特化で後ろの『攻機動粒子機関へディファレンシャル・フレイム』が主砲であり、これで倒していた。

しかし、その後新たな魔導兵器が出てきた。『竜騎兵へドラグリエ』と呼ばれるやつだ。

さすがのユリシアさんでもこいつと戦うのは難しく、クロスのエネルギーが尽きようとしてクロスが解除された。

不味いと思ったが、ギリギリ兄さんが絶対領域で守った。

そこから奇跡が起きた。いや、奇跡とは呼べないけど。

兄さんはなんと、ユリシアさんの胸を掴んでいた。その後、二人の体を金色とピンク色の輝きが包んだ。あれが接続改装が成功した証拠だとか。

結論から言わせて貰うとエネルギーが回復したクロスは凄く強かった。

続く!!

第陸話　　デートと過去

傷無サイド

『怪我の具合はどうだ？』

『兄さん、大丈夫だった？』

どうやら、姉ちゃんと剛希が見舞いに来てくれた。俺は二人にユリシアの様子と何故、接続改装が出来たのかを聞いて見たが、どうやらユリシアは大丈夫だった。

だけど、もう一つの事を聞いて見たが答えはこうだった。

『傷無、お前って奴は……』

『兄さんはこれだから……、鈍感なんだよ。』

二人とも、頭を抱えていた。どういう事だろう。

剛希サイド

全く、なんで兄さんはあんなに鈍感なんだろうな。これもラノベ主人公が持つステータスという事なのか。

それと兄さんはあと二、三日で退院出来るとの事。

そして三日後、学校に行く事に。

『一週間ぶりだな。なつかしい感じだよ。』

兄さんはこう言うけど、

『まあ、兄さんはしょうがないだろ。』

まあ一週間を休めばな。そう思うのも仕方ないだろう。

え、僕はどうしたって。僕はね、普通に学校に行ってましたけど何か？

そして、扉を開けた。

『キズナっ！』

『う、うわ、ユリシア』

開けたら、ユリシアが兄さんに駆け寄って来た。

兄さんとの距離が近い。そして顔も近い。教室に動揺が走る。

ちなみに何故、呼び捨てにしているのはユリシアが呼び捨てで呼んでもいいと言われたのが理由だ。

『ちよっと、そのの二人。なにイチヤイチャしてるんですか！』

姫川さんは元気だなあ。もちろんユリシアも元気だけど。だってあんな戦いをしたのに、おしゃべりしているからな。

そう思うと、千鳥ヶ淵さんも教室に入ってきた。

すると、ユリシアが千鳥ヶ淵さんに近づいて、接続改装の話をしていった。どうやらユリシアはいつでも接続改装が出来ると言っているが、千鳥ヶ淵さんはその話を聞かずに席に着いた。なんか悔しそうに見える。

授業の様子はまあ、キンクリだね。

『ただいまー』

さあ、お部屋に帰ってきましたが。

『お帰りなさいデス！隊長、副隊長』

僕らのお部屋にシルヴィアがいた。

どうやら、僕らが留守の間はシルヴィアがお部屋を守る役目らしい。

部屋に上がったたら、テーブルの上にはすでに料理が並んでいた。

『これはシルヴィアの故郷、イングランドの料理デス』

『イギリス…料理』

それってあれだよな。不味いやつだよな。そう思っていると、

『あ、いまイギリス料理が不味いと思ったデスね？』

おう、読まれているわ。だが、シルヴィアが作った料理は不味くなく、凄く美味しい。

そして、シルヴィアの親は本国のイギリスにいるらしい。

つまり、異世界の連中がいる場所に住んでいるということだろう。その話を聞いて兄さんは傷無隊の力でイギリスを取り返す事を誓った。

そしてその夜。

二段ベッドの上で寝ていた、僕は下の物音で目を覚ました。降りて見ると、

千鳥ヶ淵さんが部屋を出て行く所をみた。

妙に悲しそうだったな。話を聞いてみると背徳武装を手に入れようとして部屋に来たらしい。そこまでして必死にならなくてもいい

のにな。

次の日の話は特に僕の方では余り出来事は起きなかった、兄さんには起きたがな。それはユリシアとのデートだ。

まあ、ユリシアのあの顔は恋に落ちた顔だな。

ここは弟らしく、見守ろう。そう……

『実際に尾行しながらね!!』

こんな弄りがいのあるネタを見て見ぬふりなどしないよね!!

着いて行ってみると最初は京都、次は沖縄、神奈川、北海道、大阪、最後にまた京都と東京に来た。凄く疲れる。アクティブな一面を知ったよ。しかし、ユリシアと兄さんのご飯凄かったな。和食と洋食どっちも食べるなんて。

そんなイベントを終え、僕は兄さんにバレないように寮の部屋に戻ってベッドに入り、就寝。

次の日

兄さんから、千鳥ヶ淵さんの事を知ろうと跡をつけようと尾行している。

『跡をつけているんじゃ、何の手がかりも得られないな……』

『まあ、兄さんがユリシアから聞いた話から手がかかりを得る事なんて出来なかつたでしょ』

『何の手がかりを探しているのですか?』

『うわっ!!』

びつくりした。まさか姫川さんが後ろにいるなんて。ちなみに姫川さんにも千鳥ヶ淵さんの事を聞いて見たけど、知らないらしい。

最後の頼みは姉ちゃんと思い、僕達はラボへ行き、姉ちゃんに話を聞いて見た。わかつた事は、

千鳥ヶ淵さんはどうやら記憶喪失であり、千鳥ヶ淵という苗字も皇居の周りを囲む堀に千鳥ヶ淵という堀に浮かんでいる少女を保護した。それが千鳥ヶ淵らしい。

ちなみに千鳥ヶ淵 愛音という名前を名付けたのは母親だと。

まあ、大変だったんだなと思っていたら。

突然、警告が鳴り響いた。

続く!!

第Ⅹ話

襲撃

突然、警告が鳴り響いた。

『ケイ！何事だ』

『敵襲。アタラクシアから二百キロ先に敵艦隊出現』

どうやら、敵の襲撃らしい。

規模は二千メートル級の戦艦一隻、千メートル級以下の艦船がおよそ三十隻。うち半分が空母、残りが護衛艦だとの事。

『凄い大艦隊だな。』

『剛希、呆れるのもわかるけどしつかりしろよ。』

兄さんが言うのも一理あるが、僕はドロスの力を試したいのだ。まだ一回しか戦った事がないんだから。

そして、戦闘態勢に入ったアタラクシアは、色々と凄かった。まるで第三新東京市のようなだ。

『さて、行きますかね。ドロス!!』

そう言い、僕はドロスを纏った。

ちなみに兄さんは留守番だ。兄さんのギアは戦う力を持ってないからね。

そして、兄さんを除くアマテラスの皆が、敵艦隊に向かった。

『大丈夫でしょうか：私達だけであんな大艦隊を倒すなんて』

『ハユルらしいわねえ。ま、ベストを尽くすしかないんじゃない？まあ、いざとなったら傷無とここの剛希君もいるからね？』

『僕に期待しないで下さいよ』

ほんとに困る。そういう期待はして欲しくない。

何故なら、その期待が崩れると絶望しか残らないからだ。

『それと愛音さんは大丈夫ですか？』

『質問の意味がわからないわ』

姫川さんが心配するのもわかる。千鳥ヶ淵さんのゼロスは近距離専門だから、遠距離武器は、コアに内蔵されていないから、ただの重火器しかない。

『千鳥ヶ淵さん、大丈夫なのか、僕達でフォローするから無理をしない

で下さい』

『余計なお世話よ』

えくほんとでござるかあ〜なんて煽る気はないけど、とにかく心配なんだよね。兄さん曰く背徳武装を手に入れることに執着しているらしいからね。

とにかく、気をつけないと。何か変な感じがするんだよね。

『いいか。叩くのは敵の旗艦、二千メートル級の大戦艦だ。奴の射程がアタラクシアを捉えるまでに約十五分。その前に敵の主砲を潰せ！』

『まーったく、簡単に言ってくれるんだからあ』

ユリシアは呑気にこう言ってるが、正直に言えばキツイ。

そう思っているとアルバトロスの部隊がきた。

ユリシアは背中の攻機動粒子機関を使って、アルバトロスを倒していく。

姫川さんは『弩弓駆剣へブレイド』を使って倒していく。

千鳥ヶ淵さんは手にしたアンチマテリアルライフルと自らの腕で倒していく。

これでもまだ届かない。あと7分で二、三十キロ先の艦隊にたどり着かないといけない。

しかし、出て欲しくない奴である、竜騎兵が来てしまった。

さて、自分の役目を果たすでしょう。さっきまで皆が頑張ってる敵を倒してきたのだから。

『皆、先に行ってください。』

『『え？』』

『早く！皆は戦艦を壊して!!』

そう言うと、皆は戦艦の元に飛んだ。

『さて、行ったか。竜騎兵よ、ここを通す訳には行かないだ。どうしても通りたかったら、僕を倒す事だな。』

そうやって、僕は竜騎兵に挑んだ。

まずは、能力は白龍皇の能力全てを入れて置くか。

そして、僕は竜騎兵の元に飛び触れて、減少の能力を発動させた。

「Venom、Venom、Venom、Venom、Venom」
こいつは吸収せず、ただカウントを減少する能力だ。

原作だと、無機物以外の物を徐々に減らす能力であるが、この世界に来て、能力が変わった物だ。

まあ、赤龍帝の透過の能力も変わったけど。

取り敢えず、減少の能力は詳しい事は使ってみてわかったけど、吸収の下方互換なんだよな。

なんというか、使いにくい。

こんな事は置いて、奴にも宝具放ちますかね。

そして、貯蔵から一振りの斧「黄金喰い〈ゴールデンイーター〉を出して、詠唱する。

『吹き飛ば……必殺！【黄金衝撃〈ゴールドensparker〉!!』

黄金喰いの中にあるカートリッジ15発の内3発を使って発動する宝具。

範囲の広い稲妻が、竜騎兵を喰らう。

一瞬にして、竜騎兵が蒸発した。

これで、ランクCだからね。前に発動した〈ヴァサヴィ・シヤクテイ〉はEXだったけど、遠くから撃ったから威力がわからなかったけど近くで撃つとどうなっただろう。

だけど、考える暇はなかった。

それは、ここにいないはずのない兄さんが戦艦の攻撃を受けて、ギアが解除して落ちていく千鳥ヶ淵さんを助けて、戦艦の砲撃を受けて落ちていくのを見てしまったから。

続く!!

第捌話 背徳武装

兄さんが落ちていく様子がスローに見える。

人は大事な人が事故なんかで巻き込まれると、その風景がスローになるのをドラマなどで見るけど、あれって本当だったんだな。

『兄さん!!』

そんな現実逃避は止めよう。とにかく助けないと駄目だ。

僕はギアのスピードを上げて落ちていく兄さん達を受け止めた。

とにかく、ラボの方に運ばなければ。

『姫川さんとユリシアはここで前線を維持しといてくれ。僕は兄さんと千鳥ヶ淵さんをラボに運ぶから。』

そう言っ僕はラボに向かった。

『姉ちゃん!兄さんと千鳥ヶ淵さんが!』

『分かっている!とつととラボの医療室に運べ!』

こうして、兄さん達を医療室に運んでいき、僕はまた戦場に戻って来た。

さて、僕も兄さんの仇討ちに行きますかね。

そうして魔導兵器の大群に突っ込んでいった。

姫川サイド

『なんという事ですか…あの強さは……』

私、姫川ハユルは衝撃的な光景を見ています。

それは大量の魔導兵器相手に彼、飛驒 剛希君が1人で戦っているという事です。あんなに多くの魔導兵器を相手にするなんて、無茶にも程があります。

しかし、そんな事関係ないと言っても言うように倒していきます。いえ、殲滅という方が正しいでしょうか。しかしあの鬼気迫った顔はなんでしょうか？

剛希サイド

さて、ある程度は片付いたかな?それと姫川さんとユリシアにカウ

ントの譲渡でもしようかな？

そう思い、2人の元に飛んでいった。

『2人とも、カウント大丈夫？足りないのなら渡すよ。』

『え、ええ、お願いします。』

『同じくお願いね。』

2人の了承も得たので、やりますか。

「Transfer!」

音声が鳴ると2人のカウントが回復した。

さて、兄さん達はまだ終わらないのか。

そう思っていると、兄さん達が帰って来た千鳥ヶ淵さんのゼロスは凄くでかい大砲を携えているが、もしかするとあれが背徳武装なのか。

しかし、それよりも兄さんが敵陣に突っ込んでいくのが驚いた。兄さんは戦う力を持っていないのに死ぬ気かと思ひ、援護に向かうがその心配は無くてへモード ゼロスという能力が発動し、カラーリングがゼロスと同じ感じになった。

『兄さん！大丈夫なのか？それとその姿はどうしたんだ。』

『ああ、大丈夫だ。それとどうやら絶頂改装した相手のギアの能力を使えるみたいだ。』

兄さんのギアはこっちと同じようでチートだな。

そして、千鳥ヶ淵さんのゼロスの背徳武装である「全時空粉碎へバルバライザー」の威力は凄まじいの一言だ。

あんなに多かった魔導兵器や戦艦が消し飛ばされている。

そして、千鳥ヶ淵さんがもう一射、戦艦に向かって撃ち、当たる瞬間、何者かがやったのか知らないが一瞬でかき消された。

皆が驚いている中、僕はぼんやりだが人影が見えた。

緑の髪をしたハイブリッド・ギアを装着している女を。

続く!!

第玖話 襲撃の終わり

夜空に花火が上がる。

曇りのない空に星が輝いていて凄く綺麗な星空だ。

メガフロート日本あげての祝勝パーティだ。僕はアタラクシアの司令本部アマテラス専用ラウンジのバルコニーで兄さんと共に外を眺めていた。

『綺麗な星空だな、兄さん』

『ああ、そうだな』

バルコニーから見える景色は人々の活気に満ちている。まあ、襲撃による緊張がほぐれたのか人々はお祭り気分だ。わからなくもないけど。

そんな事よりも気になるのは、緑色のハート・ハイブリッド・ギアだ。愛音さんの背徳武装をかき消した奴は緑色の髪をしている背の高くて足の長い、スタイルのいい女性だったが、少なくとも味方ではなさそうだ。

あのかき消した力が空間に作用するものなら、透過の能力を使う事ができるだろう。

地球だとあんな緑色の髪が地毛で持っている人はいないだろうし、嘘みたいな話だけど異世界の人という事になるのか？

しかし、考えてみても答えは纏まらないしな。今はこのパーティを楽しまなきゃな。

そう思うと姉ちゃんがこっちに来た。

『どうした、傷無、剛希。こんなところで何を黄昏れている』

『そういう姉ちゃんこそ。こんなところへ逃げてマズいじゃないのか？』

『兄さんに同じく』

返答を返すと姉ちゃんはワインを瓶ごとラッパ飲みした。

『生徒が見たら幻滅するだろうなあ』

兄さんはにやにや笑っている。

『お前はいい気なものだな！傷無！小娘どもとイチヤイチャと！』

『誰がやらせたと思ってんだよ!』

『好きでやらせてたとしても、思っているのか!』

あーあ。姉弟ゲンカが始まったよ。僕は神様に転生してもらった存在だ。こういうのを見ると改めて僕は転生したんだと感じてしま
う。

だから、こういう事を見ると羨ましくなる。

『ふっ、あははははは!』

『?』

『ごめん、なんか笑えてきてさ。不謹慎なのは知ってるけど』

『変な剛希だな』

『同じくだ』

兄さんや姉ちゃんが、変な目で見るけど知ったこっちゃない。僕は
その言葉を後にバルコニーを去った。

傷無サイド

剛希がなんか変な事を言っつて、バルコニーを出た後姉ちゃんも出
行っつて入れ替わりで愛音が来た。

『あ、愛音?』

『あたし以外の何だというの?お姫様とでも思った?』

『ああ…お姫様にしか見えないな』

『っ……』

実際、愛音は美しい白と青のドレスを着て、肩を露出していて、二
の腕まであるグローブをしている。うっすらと化粧もしていて、元々
美しい顔がより際立たせている。

愛音は言葉に詰まらせると、アタラクシアの夜景を見つめていた。

『…ねえ、傷無』

『あたし、クライマックス・ハイブリッド絶頂改装をすることで、背徳武装の他にもう一つ手に
入れたものがあるの』

『そ、それって一体?』

『それは、記憶よ』

『えっ!?!』

傷無サイド END

二人から離れて料理を楽しんでいたら、フローティングウィンドウ
我慢現れて、識名さんが出てきた。

『どうしたんですか？ 識名さん』

『剛希、あなたに聞きたいことがある。あのギアについて』

『ドロスについてですか』

『そう、正直あのギアは規格外の力を持っている。本当の力を最大限
に使えば、この世界を破壊しかねないぐらい強力。気をつけて』

『わかってますよ。それに僕もこのギアの力を使いこなせていないの
で、そこまでの力を出せないと思います』

『そう。わかってくれるなら良かった』

そう言うと、識名さんはウィンドウを閉じた。

正直な話、このドロスには世界を破壊できる宝具という武装があ
る。この力は強力だ、僕はこのギアを使いこなせることができるのだ
ろうか。

そう思いながら、僕は兄さんに集まっているアマテラスのみんなと
合流した。

太平洋のどこかを異世界の艦隊が進んでいた。

その先端には、ハート・ハイブリッド・ギアによく似たシルエツト
が立っている。緑の髪が風で揺られながら、何者かに通信をしてい
た。

『搜索対象を確認した。至急、本隊を派遣されたし』

新たな世界と全時空粉碎バルバライザー

完

過去の因縁と絶世破断へグラデイウス 第壱話 温泉と姉の秘密

飛騨傷無と飛騨剛希は、音を立てずに廊下へと出た。

ただいまの時刻はすでに零時を回っていた。

しかし、二人は意気揚々としている。部屋着というラフな格好にもなっている。

二人は心が踊っているのか笑みを浮かべている。それも当然、ついに大浴場に入れるのだ！

ここは、^{アマテラス}天地穹女神のフロアであるため当然女子寮である。二人の部屋にも立派なバスルームがあるので、大浴場に入る必要などないのだが今日は違うのだ。

なんと、今日の大浴場は温泉である。技術部門の連中が海底で温泉が見つかり、今日一日だけ温泉になっているのだ。

日本人としては入りたいものだが、ここは女子寮。入れるわけがないが、二人の姉である飛騨怜悧の鶴の一声で、零時以降は清掃という形で開けてくれたのだ。

そして、二人はついに大浴場に着いた。

『ここが大浴場、広いな』

『兄さん、先に入ってて。僕はお手洗いに行ってくる』

ついに大浴場に入れるぞ〜！今日は温泉だから、楽しみなんだけど姉さんのことだから、何かあるかも知れないと思うと少し怖いが些細な事だと信じたかった。

そう、お手洗いに行っている時に轟音がなり、急いで戻ると壊れている大浴場となぜかいる千鳥ヶ淵さんとタオルで体を隠しながら、ギアを纏っている姫川さんと姫川さんのギアの武装である弩弓^{ブレイド}駆剣にやられている兄さんがいた。

この事件の真相はどうやら姉ちゃんのようにだった。僕達は、校長室に呼ばれて事情聴取を受けていた。話を聞いてみると僕達は貸し切りと聞いていたのに対して、姫川さんはそれを姉ちゃんから聞かされ

ていなかっただらしい。それも偶然ではなく、故意でそうしたのと
と。

これに対し、二人は凄く怒っていた。まあ、当然だよな。兄さんは
温泉に入れず、姫川さんは異性に裸を見られたので怒るのも当然のこ
とだと思おう。

姉ちゃんは、兄さんと姫川さんとの仲を深めようとこのようなこと
を起こしたらしい。そしてあわよくば接続改装をして欲しかったら
しい。

まあ、僕は大浴場の破壊には関与はしていないので、ささつと校長
室から出て行った。

傷無サイド

『一体どういうおつもりですか！総司令！』

剛希が出て行った後、姫川は凄く剣幕で机を叩いた。

『お前こそどういうつもりだ。一体いつになれば、傷無と接続改装す
るんだ』

『そんな破廉恥なことをしなくても、剛希君のギアの力でカウントは
増やせるではないですか！』

『いつまで我が儘を言うな。剛希の譲渡だって渡せる上限がある。傷
無、姫川のカウントはいま何%だ？』

『姫川のでカウントは35%だな。そろそろ危ないかな』

そう。カウントことへハイブリッド・カウントはギアを動かす為
のエネルギーだ。25%を切るとイエローゾーン、10%を切ると
レッドゾーンとなり、5%を切るとギアを維持するのも難しくなる。

カウントの自然回復もあてにならない。姫川はあの戦闘の後、二週
間が経つが回復したカウントはわずか3%なんだ。

カウントを大幅に回復するには、俺との接続改装か、剛希のカウン
ト譲渡しか無いが、剛希の方もカウントは無制限ではない。

『今、敵が現れたらどうする？コンディションを整えるのも戦いの内
だ。』

確かにそうだとは思いますが、いまの姫川には難しい話だと思う。

『姉ちゃん、ひとつ聞きたいことがあるんだけど』

『なんだ？』

『カウントを使い果たしたら、俺たちはどうなるんだ？』

姉ちゃんは椅子を回転させて俺に背を向けた。

『まだ、なんともいえん。ラボでケイが研究を進めているところだ』

『そっか。わかったよ』

姉ちゃんの表情を見えなかったが、俺は姫川と共に校長室を出た。

伶俐サイド

深いため息をつき、窓に映るアタラクシア復旧工事の現場を見る。

『すまないな、傷無。お前には話さないといけなが今はまだ知らないでいいことなんだ。』

『伶俐、いいの？』

ケイがフローティングウインドウを出して聞いてきた。

『ああ、いいんだ。まだこの真実はあいつらにとつては重すぎる』

本当は知っているのだ、カウントが減るとどうなるのかは。普通のパイロットなら言えるがあいつらは特別なギアを纏っているから、言えないのだ。

そう。彼らが纏っているギアはヘエロス、ゼロス、ネロス、クロス、ドロスとくロスとついているギアはロスシリーズと呼ばれ、これらは他のギアとは違う点が四つある。

一つはロスシリーズは他のギアに比べて、基本性能が高いこと。

一つは絶頂改装することにより、背徳武装が得られること。

一つは通常のギアよりカウントの自然回復が遅いこと。通常のギアなら、一週間もあれば、完全回復するのだ。

そして最後の一つは、ハイブリッド・カウントが0になると普通のギアなら、意識を失い、倒れるだけだが、ロスシリーズはカウントが0になると、

命を失ってしまう。